ふるさとへぐり再発見

椿井（つばい）・西宮（にしのみや）遺跡

16

竜田川駅の南側200m付近、線路を挟んで両側に弥生時代から古代にかけての土器の散布している遺跡が存在します。

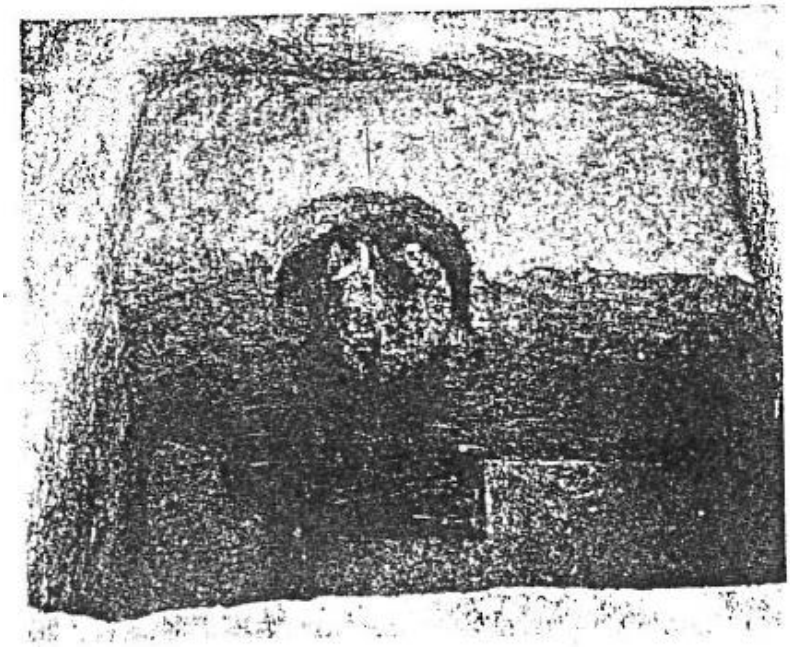
ここが椿井（つばい）・西宮（にしのみや）遺跡で、大字の地名をとって名付けられました。

昭和58年8月、宅地開発に伴って直径42㎝も太さのある柱の根っこが発見され、遺跡の存在が明らかにされました。

このような立派な柱は飛鳥の宮殿や寺院でしか使用されず、緊急に発掘調査が行われた結果、直接柱（はしら）を地面に埋める構造の建物（堀立柱（ほったてばしら）建物）の一部であることがわかりました。

柱の直径は0．4～0．42mで、3m間隔に立てられ、柱を埋める穴（掘方（ほりかた））は一辺が1．3m～1．5m、深さ1～1．3mの方形をしており、柱の下には礎板（そばん）（柱が沈下しないようにかませた板）が挟まれていました。この礎板は他の建物の一部を用いた転用材で、数枚ずつ挟まれていました。

確認された柱の並び方から、この建物は北側に庇（ひさし）が付き、南北4間、東西7間ほどの北向きの建物であることがわかりました。



巨大な柱根と礎板

柱の掘方より出土した須恵器の歯偏が7世紀中頃以降の特徴があり、この遺跡におけるもっとも新しい段階の建物とみられています。

このように7世紀を中心とした遺跡で、立派な建物が存在することから、聖徳太子関連の上宮王家（じょうぐうおうけ）の別荘、高安城の関連施設、平群郡衙（ぐんが）等の諸説が考えられています。

昨年度の分布調査で、弥生時代後期（1800年前）の土器が採集され、遺跡が長期間続いていたことがわかりました。